雛道具にかかわった人②　長尾よね　　史料番号　4602

昭和の初期、夫の長尾欽弥とともに「わかもと」という胃腸栄養剤を製造、販売して一代で巨万の富を築いたが、それを一代で使い果たしてしまった伝説の女傑。

その財力により、美術品の蒐集を積極的に行ったので、今日も残る国宝級の絵画、彫刻、陶器など多数の美術品が、一時、長尾よねの手許に集まっていた。

「仁杉家の雛道具」も東京美術倶楽部で行われた柿沼家所蔵美術品の売り立てで長尾よねが落札し、戦後まで、長尾家の鎌倉の別荘の地下にあったという。

長尾よね　関連年表（白崎秀雄の「当世畸人伝」などから作成）

和暦	西暦	年齢	記　　事
明治22年	1889	0	8月26日浅草馬道町で誕生。母　志か　私生児。後に元土佐藩士で明治の元勲の一人、田中光顕が父親としてよねを認知している。光顕47才、志か35才。
25年	1892	3	後に夫になる長尾欽彌、京都府下相楽都湯船村射場に生れる。
37年	1904	１５	表具師の伯父八百吉とともに京都市上京区堺町通姉小路丸木材木町に移る。
40年	1908	１８	母に薄めて祇園でお茶屋を開く。
41年	1909	１９	この頃、川田亮治郎と東京へ駈落ち。川田は東大工学部土木科卒の９歳上の技師、実家は大阪の住吉屋という両替屋。
大正８年	1919	３０	川田亮次郎と結婚、清實を生む。世話になった伯父の後藤八百吉が４５才で死ぬ。腕の立つ表具屋であった。
昭和元年	1926	３７	川田が長尾欽弥を連れて来るてよねに紹介した。この時から川田、長尾、よね３人の奇妙な生活が始まる。
昭和３年	1928	３９	母親の志かが京都で亡くなる。享年74才。 川田が学者から酵母が薬品として優れているという話を聞き、大坂で企業化を計画したが、よねの勧めで帰京し、長尾とよねに合流。東大の農学博士沢村真が酵母の研究を重ねていることを知り、沢村の指導で酵母を錠剤にする事に成功。 たまたま観た洋画からヒントを得て砲丸投げの姿をシンボルマークに使う事とし、さらに新薬の名前を「若素」と決めた。
４年	1929	４０	４月「若素」発売。婦人倶楽部６月号に大広告を放つ。当時最も発行部数の多かった婦人雑誌の６ページにわたる広告は東大の沢村博士の「脚気・肺結核・胃腸病に大効ある酒母の話」という署名記事もあって大反響を呼ぶ。 「若素」は売れに売れ、徹夜作業、パートや下請け工場を使っても需要に追いつかないほどだった。 この年、井上渓松子爵家の売り立てがあり、左文字の短刀を約３千円で落札。この短刀は後に国宝に指定される。

			12 月、川田と協議離婚する。
5年	1930	４１	桜新町（世田谷深沢４丁目 132 番地）に 500 坪の土地を買い邸を建て始める。その後、次々に買い広げ 7800 坪に達した。京都の数寄屋建築師大江新太郎に建築の設計を依頼し、10 年の歳月をかけて完成した邸は宜雨荘と呼ばれた。 岩城亘太郎に庭造りを担当し、その後 10 年余もかかって造った長尾邸庭園は、昭和 28 年年刊「日本の庭園」（岩波書店刊）にもその写真が掲載されたほどだった。 この年に骨董古美術刀剣などの蒐集も本格的に始める。
6年	1931	４２	「若素」を「わかもと」と改名 ５月説田家の美術品売り立てで中国古代の銅器を３千円で落札 **6月 22 日、芝愛宕下町の東京美術倶楽部で行われた柿沼家の美術品売り立てで「仁杉家の雛道具」を落札。**
7年	1932	４３	芝公園、大門の近くに本社設置。 疲弊していた相撲協会に、１万円を寄贈。二所一門を後援し、とくに神風正一を贔屓にした。
8年	1933	４４	東京美術倶楽部で大蒐集家松本隻軒庵の売り立てで野々村仁清作の「色絵藤花文壺」を 19 万８千円という入札史上最高水準の値で落札。後に国宝となり、現在熱海のＭＯＡ美術館の所蔵品中の自慢の名品となっている。 12 月、長尾欽弥と婚姻を東京府下南多摩郡鶴川村役場に届け出。
10 年	1935	４６	この頃、鎌倉に別荘を建てる。鎌倉市笛田、通称鎌倉山に飛騨高山から移築した桃山期の豪農の家を、建てなおして母屋にした。切り通しから道まで買って、すべてで 13 万坪、その高台から俯瞰すると、杉木立の間から海が扇形に見えるので扇湖山荘と名づけられた。
11 年	1936	４７	春から秋にかけての約半年間、欧米を旅行。ドイツでは「わかもと」の原料となる酵母の確保という目的があった。通訳や医師のほか、骨董商までが同行、総勢８名の大名旅行であった。ドイツではヒトラーとも会見し、一緒に写真を撮った。その写真は戦争中、応接間に掛けてあった。
12 年	1937	４８	売上げ協力への報奨として「わかもと奥さま券」を考案、陶芸界の巨匠・北大路魯山人の作品を賞品とするなど、魯山人を後援するようになる。 ７月、溝橋事件が起きると、戦闘機を献納、後みは海軍にも戦闘機を献納した。日本軍の大陸進攻につれて「わかもと」の軍への納入が増え、売行きは伸びつづけた。
15 年	1940	５１	「わかもと」の売行きが頂点となり、年間売上が一千万本に達した。

17年	1942	５３	前年に勃発した大東亜戦争で軍との関係を深め、「わかもと本舗」は軍の監督工場となる。
18年	1943	５４	築地の「田川」という料亭を購入し、接待専用のクラブとした。近衛、東久邇、永野など政府要人を長尾邸に招き酒宴をたびたび催す。戦時中に長尾邸で饗応を受けた要人には、ほかに下記のような人があった。侯爵木戸幸一、公爵一條實孝、海軍大将山本英輔、同小林蹄造、検事総長松阪広政、元帥陸軍大将寺内寿一、同杉山元、貴族院議員で野村財閥の栖躋造、検事総長松阪広政、元帥陸軍大将寺内寿一、同杉山元、貴族院議員で野村財閥の得庵野村徳七。
20年	1945	５５	敗戦で会社の状況は一変、朝鮮、台湾、満洲、北京、南洋等に在った海外財産をすべて失う。砧の工場は焼け残ったが、共産党指導の組合によって占拠され操業不能となった。 12月6日、連合軍総司令部は、公爵近衛文麿、侯爵木戸幸一ら９名に対し、同月16日午後12時を期限に逮捕すると通告した。11月27日から軽井沢に滞在していた近衛は11日、東京に向けて出発したが、荻窪西田町にある本邸の荻外荘ではなく、桜新町の長尾邸に入った。15日までの４日間を長尾邸で過ごした近衛は雛道具を飾った前で酒を汲み交わしたという。15日夕刻、本邸の荻外荘に戻った近衛はその深夜、服毒自殺を遂げた。よねからもらった青酸カリを飲んだといわれている。 終戦後は軍人や政治家に代わって、林房雄、久米正雄、岩波書店の小林勇、青山二郎、福田蘭童、梅原龍三郎、安井曾太郎、小林古径、安田靫彦、里見淳、志賀直哉、児島喜久男などの文士、画家、それに芸能人や力士に芸妓などが身辺に集りはじめた。
21年	1946	５６	大衆は食糧不足に苦しみ、栄養剤などには見向きもせず「わかもと」の売上が激減。 新しい税制で個人の財産に巨額の財産税が課せられるようになり、この課税を免れるため、鎌倉山の別荘に展示室を作り、財団法人「長尾美術館」を設立、美術品を財団法人に移した。 売上が減ってもよねの生活は全く変わらず、金を使うため、所有していた株を抵当に主力銀行の安田銀行から融資を受ける。その額は幾何級数的に増えて行く。
23年	1948	５９	安田銀行の手で株式の店頭公開がはじまる。
24年	1949	６０	東京証券取引所に上場した。
26年	1951	６２	欽彌は株式会杜ナガ製薬を設立、寄生虫の駆虫剤「アスキス」の製造販売を始めた。
27年	1952	６３	「アスキス」の売れ行きは良かったが、普及して寄生虫が少なくなるとともに需要がなくなり、売上が減少した。

			秋、ナガ製薬の工場が爆発事故を起し、怪我人が出た。
28 年	1953	６４	ナガ製薬が倒産。虎ノ門の青山泰蔵という道具屋に美術品を売却始める。後に駿河台の美術商・荻原安之助が委任されて美術品、道具の大量処分が始まった。 **この頃、仁杉家の雛道具も板橋の弁護士に売却された。**
29 年	1954	６５	次々に所蔵の美術品が処分された。 長澤盧雪の「月夜山水図」が蒜川美術館に、六祖（りくそ）の「竹切りの図」、高然曄の「双幅図」が東京国立博物館に、赤絵金欄手瓢形瓶の名品は、繭山龍泉堂の手で安宅コレクションに入った。旧国宝の等身大の聖観音は、第三国人の蒐集家の手に渡った。初期浮世絵清水屏風は大和文華館に、紙本金地の二枚折「機織り屏風」と仁清の藤の花の壷はＭＯＡ美術館に入った。国宝の左文字の短刀は、五百万円で愛刀家の青山孝吉弁護士の手に渡った。
30 年	1955	６６	桜新町の邸を坂内ミノブに総額六千万円で売却した。
33 年	1958	６９	晩秋。白洲正子が取材のため鎌倉山によねを訪ねる。
34 年	1959	７０	「小説新潮」二月号に長尾よねについての白洲正子の短文「女傑」が掲載される。
40 年	1965	７６	桜新町の邸を売却した後、青山高樹町の借家、渋谷駅近くの高台の高木荘アパート、次いで芝大門の日活アパートなどに住んでいたが、この年、原宿のセントラルマンシヨンに入った。少し前から糖尿病を患い眼が悪くなっていた。
41 年	1966	７７	糖尿病が悪化してホテルニュージャパンなど都内のホテルに移っていたが、結局、鎌倉山の別荘に落ちつき、ふたたび外へは出なかった。
42 年	1967	７８	２月８日午後９時、78 歳で死去。法名、最勝院釈尼好美大姉。京都五条西大谷廟に長尾家墓所に眠る。

小説や戯曲に取上げられた長尾よね

長尾よねの波乱に満ちた生涯は「女傑」とうたわれ、白崎秀雄の「当世畸人伝」や白洲正子の作品（小説新潮・昭和 34 年２月号）にとりあげられている。

また昭和 63 年（1988）11 月には帝国劇場で長尾よねの生涯を描く「夢の宴」の公演があった。夫の欽彌役に小林桂樹、近衛文麿役は芦田伸介という配役であった。この脚本を書いた小幡欣治は翌平成元年、菊田一男演劇賞大賞を受賞している。

帝劇 11 月特別公演

夢の宴　女傑長尾よねの生涯

原作　　白崎秀雄「当世畸人伝」
脚本　　小幡欣治
演出　　本間忠良
出演

長尾よね	森　光子
川田亦次郎	林　与一
長尾欽彌	小林　桂樹
近衛文麿	芦田　伸介
志か	丹阿弥谷津子
田中光顕	佐野　浅男

ほか

■ものがたり■

激動に明けた明治の時代も四十五年の夏・・。京都は祇園によね丸という舞妓がいた。噂によると田中光顕伯爵の血をひいているとか・・。気はしのきいた性格とその愛くるしい面立から、そのうち祇園でも一、二の芸妓になるだろうと評判である。それだけに贔屓の客も多いが、その中には若き頃の近衛文麿もいた。彼は天真爛漫なよね丸に新鮮な魅力を感じている。そしてもう一人、鉄道技師の川田亦次郎がいた。川田は、遊びが過ぎて大阪天満の実家を勘当されてしまったが、生来の楽天的性格から懲りもせずに祇園通いを続けている。とはいっても、よね丸を身受けすることのできない川田が思いついたのが駆落であった。しかし、これは好奇心が旺盛で、一度しかない人生を積極的に生きようとするよね丸、すなわちよねの希望であったかもしれない。

当然、追手のかかった二人ではあったが、よねの母、志かの知らせを聞いて駆けつけた田中伯爵のとりなしで、何とかよね達の願いはかなえられる。しかし、母思いのよねの気持から志かも同行することになり、当惑する川田をよそに、駆落のはずが何とも奇妙な三人での東京行きということになった。

それから十年程たって、二人には清実という男の子も生まれたが、東京での暮らしは決して楽なものではなかった。確かに川田は鉄道工事を請け負いはするのだが、相変わらずの遊び好きで使う方も相当のものである。よねが金策に走り回ったり、持前の気転で工夫達をなだめたり、何とか毎日をしのいでいる有様であった。よねの祇園の頃の朋輩で、今、新橋で染千代という名で出ているさだも何かと手助けしてはくれるが、それにも限りはある。

そのような時に、よねの前に家業の薬屋はそっちのけで、発明にばかり凝っている長尾欽彌が現われた。長尾は川田と行きつけの飲み屋での知り合いらしいのだが、用途も考えぬまま作り上げた回転式信号燈を、川田は鉄道工事に利用できると持ちかけたのだ。ところがムラ気な川田は、工事を請け負ったビール工場で不快なことがあったといって、もう信号燈には興味を示さない。しかしその時の、ビールの絞り粕を捨ててある土地の

生物が異常に発育しているという話に、よねは興味を持った。そしてそれは、薬屋が本業の長尾もまた同じであった。長尾の調べによると、そのビールの絞り粕はいわば大麦のエキスであって、栄養学的にもその効果は裏づけられるらしい。二人は、それを利用しての栄養剤を思いついた。かくて、川田も加わった三人は、栄養剤・若素の製造と販売を始める。
しかし、工場を開いてみたものの、知名度の低さから売り上げはなかなか伸びない。女工の一人が芸者に身を転じることになった。駒子である。
よねはその世話をさだに頼むが、十数年前の自分を駒子に見る思いがして、行末を案じるのであった。しかし、そのよね自身の身辺も大きく変わっていく。川田の度重なる浮気に、ついに堪忍袋の緒が切れて離婚したよねは、以前からよねに思いを寄せていた長尾と結婚することになったのだ。
ところが、川田はよねのもとを去るわけでもなく、三人の若素販売のための努力と奇妙な共同生活は続いていく。そして、よね発案の奇抜な宣伝の効果もあって、若素は爆発的に業績を伸ばし始めた。
昭和十一年、よねと長尾はヨーロッパとアメリカを旅行した。二人の帰朝を祝う歓迎会が盛大に開かれたが、大勢の客を前にして、よねは得意の絶頂であった。その時、よねは別の座敷で思いもかけない人物に会った。次期内閣総理大臣とも噂されている近衛公爵である。そして、近衛にひっそりと従うのは、今やりっぱな芸者姿の駒子であった。よねの胸に去来する懐しさと驚き……。
よねは、悪化する時局の中での近衛の立場を案じると同時に、二人のこれからに幸多きことを祈るばかりであった。
国民の生活にも、泥沼化した戦争の翳りが見え始めるが、よね達の暮らしは豪勢なものであった。
だが、よねの心の中はどこか満たされない。よねはそれを埋めようとするかのごとく、古美術の収集に賛を尽くす。しかし戦火の拡大は、確実によね達の生活を脅かし始めていた。清実が軍に召集された。また、和平論者の近衛との接触を軍が詮索し始めた。そして・・。

クライマックスシーン
この芝居のクライマックスシーンは、長尾邸に４日間滞在ののち、本邸に戻る近衛公（芦田）の様子から「自害するな。」と感じたよねが、青酸カリの入った小壜をそっと近衛公に渡す第２幕４場、長尾邸の庭のシーンだが、この情景を観劇していた原作者白崎秀雄の子息が「当世畸人伝」のあとがきに寄せているので紹介する。

当代畸人伝　　あとがき
　　一代で巨万の富を築き、ほとんどすべてを失なった女傑長尾よね

昭和六十三年十一月、本書の一編「長尾よね」が舞台化され、『夢の宴』と題して帝国劇場で上演された。長尾よね役の森光子の名演技が大向うをうならせ、千秋楽には大入り袋がふるまわれた。
「脚本と俳優がいいから」と話していた白崎は終始機嫌がよかった。
一日、家人を連れて観劇した折のことである。舞台は長尾よねが、GHQ からの逮捕令

を聞いた芦田伸介扮する公爵近衛文麿に青酸カリを手渡すシーンにさしかかった。
「お殿様」
よねは、自宅荻外荘に戻ろうとする近衛に、人目を揮りながら声をかげ、歩みよる。涙を押さえながら差し出したよねの手には、服毒自殺のための青酸カリが握られていた。張り詰めた冷たい空から十二月の早い雪が舞い落ちていく。帝国劇場の中は時が止まったかのように誰ひとり微動だにせず、一心に舞台の上のよねを見つめる。
「モリツ!」
突然、二階席から低い男の声がかかった。その声に勢いがついたかのように、森光子の演技はいよいよ光彩を放つ。ようやくにして青酸カリを近衡に手渡すと、よねは力つきよろめき、慟哭する。
「モリッ。にっぽんいち!」
再び感極まった男の声が、沈黙を破った。
わたくしたちはその声の主が、先刻席をはずした白崎のものであることに気づき、恥ずかしさのあまり身を縮めた。森光子も、まさか原作者が声をかけていたとは思いもよらなかったであろう。

女傑長尾よねとその時代　　尾崎秀樹　　「夢の宴」パンフレットより

近衛文麿が荻窪の荻外荘で服毒白殺したのは、昭和２０年（１９４５）１２月１５日のことだ。戦犯容疑者として巣鴨プリズンへ入所する前夜である。

近衛ら九名の者に対し逮捕令が出たのは１２月６日だった。その頃近衛は軽井沢に滞在していたが、１１日に東京へもどると、本邸ではなく、世田谷深沢の長尾欽彌邸へ入り、１５日になって荻外荘に移っている。　荻外荘には家族や親族はもとより、多くの来訪者がおしかけており、側近の富田健治や牛場友彦はもちろん、ふるくからの友人である後藤隆之助、児島喜久雄、山本有三、安井英二、杉本重治などもいた。応接間や食堂まで近親者や友人があふれ、何人かがひとかたまりになり、近衛の健康などを案じて話しあった。後藤隆之助は「なごやかな通夜」のような雰囲気だったと回想している。

近衛は居間にひきこもっていたが、九時過ぎに後藤隆之助や山本有三が決意をただそうとして部屋を訪ねると、近衛は病院に入るのはやめたと言い、裁判を拒否するつもりだとはっきり述べた。
近衛の胸中を察した後藤は「東條英樹のようにぶざまなことのないように注意してほしい」といい、「なぜ死んでゆくか、理由をはっきり書き残してもらいたい」とたのんだという。　　その後連れ立って応接間へもどった近衛はウイスキーを飲みながら、ふだんと変わらぬ態度で一座の人々と語り合い、１１時ごろ寝室に入った。そして次男の通隆と長女の昭子をさそい、いろいろ語り残したそうである。
翌朝気がつくと近衛はすでに冷たくなっており、枕許ののお盆の上には「わかもと」などの常用薬の他に、小さな茶色の小壜が空になって置かれていた。

近衛文麿ほど、人々から待望された政治家はいなかった。人々は軍部ファッショの横暴をおさえる役割を彼に期待したが、日中戦争、三国同盟、日米交渉のすべての面で裏切られ、期待が大きかっただけに批判もまたきびしかった。盟友だった有馬頼寧は、恵

まれない不幸な時代を担当した人だけに、事志と違って悲劇の立役者におわったと評し、風見章も、近衛の政治家としての資質をある点で認めながら、動きのとれぬ時勢に政局を担当しなければならなかったところにその悲劇をみていた。

私は、次兄の尾崎秀実が近衛のブレーンの一人だったこともあって、政治家としての近衛のあり方に関心を抱いてきたが、自害を決意した近衛が、本邸に入る前の数日を長尾邸ですごしたのはなぜか、その理由がよくわからなかった。
世田谷の長尾邸は玉電桜新町の駅に近く、敷地八千坪に及ぶ豪邸だった。お忍びで一時をすごすにはもってこいの場所である。近衛がこの広大な長尾邸で時々すごすことがあったとしても当然であろう。だが死を前にした近衛がなぜ長尾邸に滞在したのか、深い意味が理解できなかった。それが氷解したのは、白崎秀雄の長尾よねにふれた文章を読んでからである。

白崎秀雄が新潮社から刊行した「当世奇人伝」に収録されている長尾よねの生涯を叙した評伝は、その素顔にふれ、よねと交渉のあった諸人物、諸事件を通して、時代の動きを語っているが、私はこの文章を読んではじめて、近衛が長尾邸を択んだわけを知ったのである。
長尾よねは、みずからの過去をほとんど語ろうとしなかった。それは性格からもきているが、それ以上に彼女がおかれた環境からきていた。

よねの生れたのは明治２２年８月だが、父の名は戸籍でも長く空欄であった。明治の元勲田中光顕伯が後に認知したようだが、よねは否定している。学歴も不詳で、京都の名門校である堀川女子専門学校に学んだともいわれている。
１０代の末頃、母にすすめて祇園で茶屋をはじめたが、間もなく東大工学部土木科出身の技師川田亦治郎と恋仲となり、駈落して東京へ移った。大井の鮫洲にあった大きな家に住み、夫の収入もかなりあったが、よねは金銭感覚にうとく、壮士風なものや浪人風の者が家に出入して、経済的には容易でなかった。

たまたま銀座に大同連盟という事務所をもつ中溝多摩吉という人物から、長尾欽彌を紹介され、よねはこの人物にひかれる。だからといって川田との間が冷えたわけではない。一時「ベーリン」という薬で大当りした長尾は、その後もアスピリンを自製してもうけたものの、大正９年の恐慌のあおりをくって倒産し、新しい企画を考えて、出資者を求めていた時だった。　よねは夫の川田と恋人の長尾の三人で田園調布に家を借り、二人の男とともに一年ほど暮らし、やがて男たちもビールの搾りかすを利用した栄養剤、胃腸剤の製薬にもと協力するようになる。この新薬が「若さの素」つまり「わかもと」だ。
「若素」は着実に売上げを伸ばして行ったが、昭和四年になると婦人雑誌に大広告を掲載し、乳幼児をもつ主婦層にターゲツトをしぼって大宣伝を展開、注文に追いつかない程の評判となる。

そしてこの年になって川田亦治郎との協議離婚が成立し、やがて長尾欽彌との婚姻が四年後に実現するが、世田谷の長尾邸が建つのも、その頃の事だ。昭和６年には「若素」から「わかもと」に改められ、外地にも販路をひろげ、砧に工場が新設される。

社長は長尾欽彌だったが、実質的な指示は社長夫人の長尾よねから発せられた。川田亦治郎は監査役をつとめた。そしてその前後からよねは、骨董や古美術品、刀剣などを積極的に蒐集するようになり、急速にその数が増える。

魯山人や荒川豊茂の後援者としても知られ、戦争中、桜新町邸や鎌倉山の山荘、築地の「田川」という専用クラブなどに出入りする軍人や著名人はかなりの数にのぼった。相撲のひいきとしても長尾よねは有名だった。戦後になると、それに作家や画家、芸能人が加わる。里見淳、児島喜久雄、林房雄、久米正雄、青山二郎、福田蘭童などもその一人だった。

しかし、敗戦で外地にあった財産はうしなわれ、巨額な財産税が課せられた上に組合の攻勢もあって業績は悪化し、融資の関係で欽彌は社長の椅子を追われ、その後設立した製薬会社も工場が爆発事故をおこして倒産した。そして桜新町の本邸も昭和３０年には人手に渡ってしまう。

川田亦治郎は昭和３９年に８５歳でなくなり、長尾欽彌は５５年に８９歳で他界した。そしてよねは昭和４２年２月に７９歳で世を去っている。

包容力に富み、金銭に対して淡泊で威勢のよかった長尾よねは、晩年は不遇だったが、それに負けることなくすごした。明治・大正・昭和三代の女傑というべきだろう。

昭和の前期は不安と混乱の激動の時代だった。打ちつづく不況の後に軍靴の響きが重なり、やがて世界の各地に砲声がとどろき、日本も世界戦争の渦にまきこまれてゆく。そして戦後も占領下の苦しい混乱の時期をくぐりぬけて、復興へと向うのだ。その時代の影は長尾よねにも影をおとしており、むしろ女傑一代の歩みと重なって感じられる。（評論家）